國學院大學学術情報リポジトリ

谷崎潤一郎文学におけるボードレールの女性美・病態美の受容：「刺青」、「悪の華」及び「パリの憂鬱」を例に

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 魏, 榕
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001594

谷崎潤一郎文学における
ボードレールの女性美・病態美の受容

―「刺青」、「悪の華」及び「パリの憂鬱」を例に―

A Case Study on the Acceptance of Baudelaire's Feminine Charm and Morbid Beauty in Junichiro Tanizaki's Works:

take «*SI-SEI*», «*Flowers of Evil*» and «*The Spleen of Paris*» as examples

魏　榕

キーワード：谷崎潤一郎　ボードレール　女性美　病態美　唯美主義
关键词：谷崎润一郎　波德莱尔　女性美　病态美　唯美主义

要旨

谷崎潤一郎は日本近代、ずっと活躍していた日本耽美派の小説家であり、その作品には、美感至上という芸術理念を表したものが多い。特に、女性から美を発見することに長け、その女性の美が常に病態の美とつながっている。ボードレールが十九世紀、フランスの最も名高いモダン主義詩人の一人であり、シンボリズム詩歌の先駆でもある。その作品において、唯美主義の傾向がかなり目立っており、女性象及び病態象を描くものが多い。本稿は「刺青」、「悪の華」と「パリの憂鬱」という二人の作家の最も代表的な作品を選び、文本比較、文本分析を通じ、創作方法及び文学理念の面から、谷崎一郎の作品が、バードレールにより、作られた美の理念の受容を研究しようとする。

本稿は、日本語とフランス語、どちらも母語としない第三言語国家の視野からの研究である。受容の形式から見れば、別々に女性美と病態美という二つの面の受容に分けてもよいが、それに対し、内容から見れば、受容と受容の異変という二つの問題に分けられる。つまり、まず、どんなものを受容したか、という問題を提出し、そういう問題を解明してから、さらに、受容したものが、どのような日本化変異を発生したか、という問題も研究しようとする。

摘要

谷崎润一郎是日本唯美派小说家，从明治时期到昭和时期一直活跃在日本文坛，他的作品很多体现了美感至上这一艺术理念，善于描写女性美，而这种女性美常常与病态美联系起来。而这种夏尔.波德莱尔是法国十九世纪最著名的现代派诗人之一，象征派诗歌先驱，他的作品有强烈的唯美主义倾向色彩，在他的作品中，多描写女性形象以及病态形象。笔者分别选取谷崎润一郎的《刺青》以及波德莱尔的《恶之花》，《巴黎的忧郁》这三部经典作品作为研究对象，采用文献法和比较分析的方法，从创作手法以及文

学理念的角度出发，意在解明谷崎润一郎作品中对波德莱尔所塑造的美感形象的受容关系。

本文从既不使用日语也不使用法语的第三国研究者的立场出发，以更客观的视野来研究上述问题。从受容的形式来看，本文将其归结于“女性美”和“病态美”两个方面的问题，而从受容的内容来看，则归结于“受容”与“受容的变异”这两个问题。在提出问题的基础上，本文对“受容了什么”，“受容之后又发生了怎么样的日本式变异”这两个问题，将进行更深层次的研究与探讨。

1．問題提起

谷崎潤一郎もボードレールも世界でよく知られている作家である。谷崎潤一郎は日本近現代において活躍していた耽美派の小説家であり、その作品には、美感至上という芸術理念を表したものが多い。特に、女性から美を発見することに長け、その女性の美が常に病態の美とつながっている。ボードレールは十九世紀、フランスの最も名高いモダンニズム詩人の一人であり、シンボリズム詩歌の先駆でもある。

谷崎潤一郎の文学は西洋文学と縁が深く、その作品にボードレールの影が所々にみられている。この二人の関係に関する研究がずいぶん早い時期にすでに発足してきて、成果も大いに収められている。

中華民国の時から、周作人がすでにこの二人に対し、それぞれの研究を行った。留日の経歴を持った周作人は、谷崎潤一郎に対する研究がより一層深いようで、例えば、「冬の蠅」という文章において、周氏が「这几天读日本两个作家的随笔，觉得很有趣，一是谷崎润一郎的《摄阳随笔》.....」[(1)] と書いたことがある。周氏自身も谷崎潤一郎と親交していた。その一方、周氏はボードレールに対し、研究も行い、中国において、ボードレール研究の先駆者といってもよい。新文化運動の早期、周氏は「新青年」という雑誌で、「小河」という現代詩を発表したが、その詩の序文において、ボードレールに言及し、「有人为我这诗是什么体，连我自己也回答不出。与法国波德莱尔提倡起来的散文诗略略相像，不过他是用散文格式，(我) 现在却一行一行地分写了」[(2)] と書いた。文学創作と文学思想がかなり繁

(1)　日本語訳：この頃、二人の日本作家の随筆を読んだが、とても面白いと感じて、その一つは谷崎潤一郎の「摂陽随筆」で……（筆者訳）

(2)　日本語訳：私が書いた、この詩がどの体裁であるか、と聞いている人がいるが、私自分自身もこの質問が答えられない。ボードレールが唱えた散文詩の体裁とやや同じであるが、しかし、（私は）いま、一行一行ずつ書いたのである。（筆者訳）

栄した中華民国時代、ボードレールと谷崎潤一郎と文学美学が早い時から、すでに中国に紹介された。しかし、残念なのは、その時代、中国の影響を除き、二人の異国作家に対し、直接的な比較研究を行った学者があまりいなかった。

いまにも、この二人の作家に対する研究が盛んであり、近年、ボードレールに対する研究が反芻の色彩が濃く、多くの研究者は民国時代の先行研究を問題点とし、ボードレールが中国に伝入された時、中国が西洋文学を受け入れる土壌と背景を論じている。例えば、复旦大学仏文科の楊振は、「法国文学在民国文学期刊中的译介[3]」という中国国家社会科学青年基金プロジェクトの研究課題を担当し、階段的研究成果とし、「病态与颓废的诗人:对民国时期波德莱尔批评中一种趋向的探源与反思[4]」という論文を発表し、民国時代のボードレール研究を遡った。より珍しいのは、楊氏が文章において、民国時代のボードレール研究者の留日背景と日本語能力に注目した。仏文科出身の楊氏に対し、この部分が学際的な視野を持っている。しかし、楊氏の論文において、この部分がただ、他の研究のための背景であり、深くの研究を行わなかく、直接に日本文学家をフランス文学家と関連しなく、直接的な文学文本の比較研究も行わなかった。

また、日本側の視野から見れば、日本ボードレール研究会、大阪大学言語文化研究科の北村卓教授は「谷崎潤一郎とボードレール--谷崎訳「ボードレール散文詩集」をめぐって」という論文を発表した[5]。その研究は大阪大学により主催した「言語文化研究」という雑誌に掲載している。北村教授は主に比較文学の視野から、谷崎訳の「パリの憂鬱」における何編の詩歌に対し、比較研究を行った。しかし、この研究は「パリの憂鬱」以外のボードレールの作品、及び、谷崎の訳本以外の作品に及ぼなかった。また、北村教授がフランス語科の出身であるから、その研究は、日本国文科の学者の見方を代表することができない。また、ボードレールの美学が谷崎潤一郎に受けられた後の変化にも及ぼなかった。谷崎潤一郎とボードレールの関係を研究する学者がいるが、しかし、そういう研究には、流派関係、つまり、フランスシンボリズムと日本耽美派の関係という大きいな面に着目するものが多い。単なる二人の作家自身に注目し、文献法で作品を分析する

(3)　日本語訳：民国の文学刊行物におけるフランス文学の訳介。(筆者訳)
(4)　日本語訳：病態と退廃の詩人：民国時代、ボードレールに対する批判傾向への探源と反省。(筆者訳)
(5)　中文译：谷崎润一郎与比德莱尔－围绕谷崎译《波德莱尔散文诗集》的研究 (笔者译)

ものがあまり多くない。例えば、中村光夫により書かれた「谷崎潤一郎論」という本において、谷崎潤一郎がボードレールを代表とする欧米シンボリズム主義文学、あるいは、欧米耽美派文学の態度を記述した。また、日本ボードレール研究会の学者たちも、広い視野から、ボードレールが谷崎潤一郎ないし日本文学の視野を論じた。これらの研究は、文学思潮の研究という面から見れば、かなり成果がおさめられたが、文学文本研究の視野から見れば、また不足がある。このほか、日本語を母語とする日本学者は、自国の文学を論ずる時、第三国の学者と比べると、その客観性がやや低いと思う。

このような状況にかんがみ、筆者は先行研究を踏まえ、二人の異国作家の影響・受容関係を明かし、その様相などについて考察してみようとした。本論は、谷崎潤一郎の作品「刺青」、「悪の華」、「パリの憂鬱」を例に、文献法やテクストの比較分析などの研究方法を通じて、谷崎潤一郎におけるボードレールの受容を、女性美・病態美の角度から見てみることを望んでいる。

2．女性美に対する受容

(1) 胴体描写及びその描写手段から見るボードレールの女性美への受容

谷崎潤一郎の作品において、女性美に対する描写はまず、最も直観的な女性胴体により現れたのである。谷崎潤一郎の胴体描写方法は主に以下のようである。①女性胴体を整体的に、朦朧的に、引き立たせること。②女性胴体の皮膚及び体の線を描写すること。③女性胴体のある部位を描写すること。その部位は、足、背のような、女性の美を表す部分でもよいし、女性特有の部位でもよい。同じように、「悪の華」において、ボードレールもそういう方法で女性の美を描写したのである。時間の流れから見れば、ボードレールが生きている時代が谷崎潤一郎より早いから、ここで、谷崎潤一郎がボードレール作品にある女性形象及びその描写方法の受容として、理解してもよい。また、谷崎潤一郎がボードレールの散文詩集を翻訳したことがあるから（後述）、この受容関係が直接なものであるということが証明できると思う。これから、文本分析という方法でこの見方を証明しようと思う。

深川の料理屋平清の前を通りかつた時、彼はふと門口に待つて居る駕籠の簾の

かげから真つ白な女の素足のこぼれて居るのに氣が付いた。鋭い彼の眼には、人間の足はその顔と同じやうい複雑な表情を持つて映つた。**その女の足は、細な五本の指の色合ひ、珠のやうな踵のまる味、清冽な岩間の水が絶えず足下を洗ふかと疑はれる皮膚の潤澤。この足こそは、やがて男の生血に肥え太り、男のむくろを蹈みつける足であつた。**[6]（選段）

ALLEGORIE

Elle marche en déesse et repose en sultane.
Elle a dans le plaisir la foi mahométane;
Elle a dans ses bras ouverts,que remplissent ses seins,
Elle appelle des yeux la race des humains
Elle croit,elle sait,cette vierge inféconde,
Et pourtant nécessaire à la marche du monde,
Que la beauté du corps est un sublime don
Qui de toute infamie arrache le pardon
Elle ignore l'Enfer comme le Purgatoire,
Et quand l'heure viendra d'entrer dans la Nuit noir;①
Elle regardera la face de la mort,
Ainsi qu'un nouveau-né,---sans haine et sans remord.[7][8]

---

(6) 日本現代文学全集，谷崎潤一郎集（一），刺青，講談社，p12
(7) Les Fleurs du Mal, Charles Baudelaire, Baudouin, p205
(8) 中文译本如下：

寓意

她眠如王妃，行如女神
她对淫乐怀有穆斯林般的虔诚
她张开双臂，尽显乳峰的魅力
她眼波流转，令多少痴男心旌摇荡
她虽是不育之女
世界的运行却少不了她
她深信：肉体之美乃是一种崇高的天赋
任何耻辱都将得以宽恕
地狱，炼狱，她都不予理睬（中国語訳文の日本語訳：地獄、煉獄、彼女は全くかまわない）
等到进入死亡的黑暗之途①（死亡の黒道に入ると）
她如新生儿一般面对死神（彼女は生まれたばかりの赤子のように、死神と直面している）
既无怨恨，一也无悔悟。(节选)（恨みもなく、悔悟もない）（筆者訳）
译本选自：恶之花，文爱艺译，作家出版社，p143

まず、注釈の中国語訳文には、翻訳の問題がある。中国語訳本はフランス語原文の注釈①のところの、原文の隠喩と倒置の修辞方法を表現しなかった。また、原文のイメージを略訳するところもある。原文を直訳すれば、以下のようである。

Et quand l'**heure** viendra d'entrer dans la Nuit noir; **時間**は黒い夜に来ると
Elle regardera la face de la mort, 彼女は死亡に直視しており、
Ainsi qu'un nouveau-né,---sans haine et sans remord.　新しい生命のように、恨みもなく、悔悟もない。（筆者訳）

原文には、「heure（時間）」という言葉があり、隠喩の修辞方法で、死亡の降臨を喩えする。また、「Elle regardera la face de la mort,Ainsi qu'un nouveau-né」という文は、倒置の修辞方法を使った。つまり、原文の語順は「彼女は死亡に直視しており、新しい生命のように」であり、しかし、中国語訳本の語順は「彼女は生まれたばかりの赤子のように、死神と直面している」である。

谷崎潤一郎の「刺青」における女性に対する描写と「悪の華」の「ALLEGORIE（寓意）」という詩における女性に対する描写を比較すると、両者は、女性胴体のある部位に対する描写により、女性美を表したことが分かれる。具体的に言えば、「刺青」において、「足」は「美」を表し、「寓意」においても、「眼差し（des yeux）」と「乳峰（ses seins）」などの女性胴体の部位を描写した。

また、「刺青」において、女性の美を表すため、谷崎潤一郎が「足」というイメージを選んだが、しかし、胸のような女性特有の部位が女性の美を表現することにより適合だと思われている。どうして、胸、あるいは、顔などの直接に見える部位を描かないのか。その原因は、以下のようだと思う。

①日本の伝統的な美意識は西洋の美意識と違っている。西洋の美意識より、日本の美意識はより間接的、朦朧的なものである。しっかり見ないと、足はあまり注意されない。このため、胸、顔より、足の美はより間接的、朦朧的である。共に女性胴体の部位を描写したが、日本伝統の美意識の影響を受けた谷崎潤一郎は、ボードレールと異なった部位を選び、この変化が受容の異変だと思う。

②欧米人と異なって、日本人は体に関する言葉が嫌い。話す時、或いは、文章を書く時、できるだけ、体に関する言葉を避ける傾向がる。これは言語習慣の差異である。

③主人公は「恋足」という癖があることを暗示する。こういう暗示を通じて、もともとの女性美の上に、病態美の要素も加えられた。こういう女性美と病態美のつながりは「寓意」にも表された。例えば、「**Que la beauté du corps est un sublime don**」（肉体の美は天からの崇高的な賜物である）という文があるが、これが谷崎潤一郎が官能美崇拝という創作理念と類似である。また、「刺青」において、「この足こそは、やがて男の生血に肥え太り、男のむくろを蹈みつける足であつた」という文もあるが、この文は、女性の美が男性の肉体と尊厳に凌ぐことと男性が女性の美に対する崇拝を表した。同じように、「**Qui de toute infamie arrache le pardon**」（彼女の眼差しは、多少の痴情な男子の心を揺れ動かせる。）という文が「寓意」にもあり、その表現意味が「刺青」の文と近い。この二つの文から見れば、二人の作家は「統治と屈服」、あるいは。「心理的な虐待と被虐待」という病態関係に対し、似ている美意識を持っている。

二つの作品には、相異点もあり、「刺青」において、女性胴体の部位に関する描写がより詳細であり、それに対し、「寓意」において、身体の部位がただ文学イメージとし、省略的に書かれたということである。詩歌と小説の体裁の差異がその原因だと思い、詩歌が短いから、詳細の詳細的に描写しがたく、ただイメージの並列という方法で、自分の考えを表現するのである。

上述の文本分析から見れば、谷崎潤一郎の「刺青」という小説において、ボードレールの女性美及びその描写方法に対する受容があり、そのうえ、小説という体裁の利点により、そういう描写がより詳細化になった。

（2）女性の胴体に傷つけ、あるいは、壊滅する傾向。

「悪魔主義」と呼ばれる谷崎潤一郎は、関西移住前に作った作品でば、そういう「悪魔主義」の傾向がより目立っている。「悪魔主義」とは、「唯美主義」の極端として理解してもよい。「醜即美」を自分の理念とする「悪魔主義」は、内容から見れば、常に醜、罪悪、美の破滅を描写し、醜と壊滅の過程から見を発見することに長ける。その起源は19世紀後半の英仏ないしヨーロッパであるが、その後、日本に伝入した。しかし、日本の「悪魔主義」はヨーロッパの悪魔主義と比べると、自分の変異がある。つまり、もともとヨーロッパの「悪魔主義」は反キリスト及びサタン崇拝という宗教の意味がある。例えば、「悪の華」には。「Les Litanies de Satan」（サタンに奉げる祈祷文）、「Les Métamorphose du vampire」（吸血鬼の化

身）のような宗教色彩をもっている詩があるが、しかし、悪魔主義が日本に伝入した後、宗教の意味が捨てられ、ただ芸術の意味をが保存された。

女性象において、悪魔主義は女性胴体の傷つけと壊滅として表現されたのである。人間の価値観において、男性より女性自分自身がより人類の美を代表しており、女性胴体の傷けつ及び壊滅は美の壊滅でもある。文本分析により、こういう「悪魔主義」の受容関係がより一層明らかになると思う。

やがて彼は左手の小指と無名指と拇指の間に挿んだ繪筆の穂を、娘の背にねかせ、その上から右手で針を刺して行つた。

「**美しくさへなるのなら、どんなにでも辛抱して見せあせうよ**」**と、娘は身内の痛みを抑へて、強ひて微笑んだ。「あ、湯が滲みて苦しんこと。**……親方、後世だから私を打つ捨つて、二階に行つて待つて居てお呉れ、私はこんな悲惨な態を男に見られるのが口惜しいから」[9]（選段）

A CELLE QUI EST TROP GAIE

Pour châtier ta chair joyeuse,
Pour meurtrir ton sein pardonné,　（日本語訳：あなたの快活な皮膚を処罰し、
Et faire à ton flanc étonné,　その驚かせる腰に
Une blessure large et creuse,②　広くて、深く凹んだ傷をしよう）
（筆者訳）

Et,vertigineuse,douceur!
A travers ces lèvres nouvelles,
Plus éclatantes et plus belles,
T'infuser mon venin, ,ma sœur! [10] [11]

---

(9)　日本現代文学全集，谷崎潤一郎集（一），刺青，講談社，p13~14
(10) Les Fleurs du Mal, Charles Baudelaire, Baudouin, p244
(11) 中文译本如下：
给太快活的女郎 (遭禁)

去抚扪你获得宽恕的胸房，
惩治你那快活的肌肤，②　（日本語訳：あなたの快活な皮膚を処罰し、
给你惊愕的腰际，　その驚かせる腰に

ここで、また、翻訳の問題がある。注釈の②のところにおいて、中国語の訳者は略訳の方法を使った。原文を直訳すれば、以下のようである。

Une blessure **large** et **creuse**,　　広くて、深く凹んだ傷。

つまり、**large**（広い）と **creuse**（深く凹んでいる様子）という二つの形容詞は「凹んだ」という一つの状態に略訳された。

「A CELLE QUI EST TROP GAIE」（とても快活な女郎へ）はボードレールが自分の恋人、サバディエ（Sabatier）夫人にあげたものであり、ボードレールの詩における女性はほとんど全部サバディエ夫人を原型としたのである。この詩は、ボードレールが自分の恋人と共寝したい仮想を表現している。一般的な人は自分の恋人に怪我をすることに忍びないが、しかし、ボードレールが自分の愛意を描いてから、「その驚かせる腰に、 広くて、深く凹んだ傷をしよう」という文を書いた。こういう行為は常識と合わなく、まさに悪魔主義が女性象の描写における体現である。愛意に満ちている美しい雰囲気のもとで、美を代表する女性の身体を壊滅し、美の壊滅により、さらに美の極致に達することである。

同じように、「刺青」において、主人公清吉は、十六、十七歳の少女の遊女の美を褒めたたえながら、無慈悲的に針で彼女の背後で刺青する。少女が覚めてから、痛いが感じる時、清吉はまた、「**美しくさへなるのなら、どんなにでも辛抱して見せあせうよ**」と言った。これも悪魔主義が女性象の描写における表現であり、針で女性の肉体に傷つけるという形式で、痛と美という矛盾を目立たせ、このように、より一層の美が表現できるのである。

上述から見れば、谷崎潤一郎の作品には、ボードレールの「女性の胴体を傷つける、あるいは、壊滅する傾向」という女性美の表現方法に対する受容が存在している。

弄上凹陷的创口。　　凹んだ傷をしよう。）（筆者訳）

啊，这使人眩晕的陶醉！
透过那分外鲜艳，
令人销魂的晶莹的双唇，
我的妹妹，我向你注入我的毒液！（节选）

译本选自：恶之花，文爱艺译，作家出版社，p139

3．病態美に対する受容

(1) 芸術美の前のさいなみと自我さいなみの傾向

谷崎潤一郎が美に対し、自我の独特の理解をもっている。つまり、美と醜は相対的なものであり、醜がなければ、美もなくなり、醜に美の要素もある。そのうえ、最も重要なのは、美を発見するには、まず、醜を認めなければならい。同じように、健康的美意識と病態的な美意識も、相対的なものであり、両方とも、美の母体となれる。谷崎潤一郎が美にたいする理念は、さいなみと自我さいなみに追求する傾向により、現れたのである。

「刺青」の主人公清吉は、芸術の美の前、激しい自我さいなみの傾向が現れた。美しい刺青を描くために、超絶的な刺青芸術と美しい刺青の担い手、両方とも欠けられないものである。女主人公に会う前に、三、五年も美しい刺青の担い手を探ったが、美しい担い手が見つけられない清吉は、毎時毎時、こういう芸術を作る欲望に苦しめられている。女主人公に会う前、このようなさいなみはより一層明らかになり、自分が刺青の犠牲者になっても、この芸術品も仕上がろうとする。「刺青」において、刺青される前と刺青されたあどの女主人公は全く異なり、刺青された後、彼女は美の代表となり、この時、彼女は驕り的、俗世に凌ぐ姿で現れている。他人が彼女、あるいは、彼女により代表された芸術のため、自我を犠牲するのは、まったく当然のこととなった。

谷崎潤一郎の早期作品集において、谷崎潤一郎自分で翻訳された「パリの憂鬱」(*Le Spleen de Paris*) の訳作が載せられている。「パリの憂鬱」という詩集には、「書かんとする願望」という詩があり、この詩において、「わたし」を主人公とし、ある極美しい女性を描こうとしており、また、彼女の注視のもとで、死のうとしている。この詩において、芸術の代表はやはり美しい女性であり、同じように、主人公の「私」は芸術の傀儡、あるいは、犠牲品となろうとする。この詩は、「刺青」と似ているところが多いから、文本の比較から、そういう受容関係を証明しようと思う。

ただに美しい顔、美しい肌とのみでは、彼は中々満足するが出来なかった。江戸中の色町に名を響かせた女と云ふ女を調べても、彼の氣文に適つた味はひと調子とは容易に見つからなかつた。**まだ見ぬ人の姿かたちを心に描いて、三年四年**

は空しく憧れながらも、彼はなほ其の願ひを捨てずに居た。[12]

「己はお前をほんたうの美しい女にする為に、刺青の中へ己の魂をうち込んだ。お前はもう今迄のやうな臆病は心は持つて居ないのだ。**男と云ふ男は、皆なお前の肥料になるのだ**……」…中略…「親方、私はもう今迄のやうな臆病な心を、さらりと捨てしまひました。**―お前さんは真先に私の肥料になつたんだんねえ**」（《刺青》選段）

書かんとする願望

人は恐らく不幸なものに違ひあるまい。しかし、芸術家は幸福である。この願望の為に心を**掻い毟られて居る**芸術家は。

私は熱烈に或る一人の女を書きたいと望んでいる。其の女は極めて稀にしか私の眼の前に現はれて来ない。さうして其れは、恰も夜路を辿る旅人が名残惜しくも後へ見捨てて行かねばならない或る美しい物のやうに、そんなに早くちらりと過ぎ去ってしまふのである。私が彼女を見てからは既に久しい月日が立つた。

彼女は美しい。さうして美しい以上である。―彼女は人を威厭する。彼女の特徴は黒の感じである。彼女が興へる感銘の凡べてのものは夜のように暗くさうして深い。彼女の眼は洞窟、其処には神秘が朦朧として顫へ耀き、そのぎろりとした眼つきからは爛爛とした光線が放射して居る。ちやうど暗夜の噴火のやうに。

私は彼女を黒いた太陽に喩えたい。―人が若し光明と幸福とを覆滅する、さう云ふ星を想像することができならば。しかし彼女を見た人はなによりも先づ月を夢見ることであらう。月―それは疑ひもなくその特有の感化をば彼女に興へて居るに違ひない。それは無愛想な花嫁に似た牧歌の中の中の白い月ではなく、暴れ荒ぶ深夜の嵐の底に、ちぎれちぎれの断雲の中にかかつた氣違ひじみた呪ひの月、それは清浄な人々の夢を訪ひ来る平和な遠慮深い月ではなく、空から引き裂枯れた薄気味の悪い残敗の月、その月の光りの下に顫へ戦く草の上では、テツサラリアの魔女どもも舞蹈をする氣にはなれないであらう。

彼女の可愛い眉根には曲りくねつた意地わるさと飽くことをしらぬ食爛の住み家とがある。その鋭敏なる二つの鼻孔は測りしられぬ無可有の国の息を呼吸し、

(12) 日本現代文学全集，谷崎潤一郎集（一），刺青，講談社，p12、p14

油断のならない顔の下には、大きな口もとのほほれは人人に火山の国に咲いている絢爛な花を想はせる。

人は多くの女を見れば彼等と結婚したくなり彼等の戀を得たくなる。しかし彼女はさう云ふ種類の女でない。人は彼女の凝視の下に静かに死んで行くことを願ふであらう。(13)

LE DÉSIR DE PEINDRE

Malheureux peut-être l'homme,mais heureux l'artiste que le désir **déchire**!

Je brûle de peindre celle qui m'est apparue si rarement et qui a fut si vite, comme une belle chose regrettable derrière le voyageur emporté dans la nuit. Comme il y a longtemps déjà qu'elle a disparu!

（中略）

Il y a des femmes qui inspirent l'envie de les vaincre et de jouir d'elles;mais celle-ci donne le désir de mourir lentement sous son regard. (14) (15)

---

(13) ボードレール散文詩集，谷崎潤一郎訳，谷崎潤一郎全集（第二十四巻），中央公論社，1983, p271~272

(14) Le Spleen de Paris, Charles Baudelaire, folio, 2017, p121~122

(15) 中文译本如下：

作画的欲望

人类也许是不幸的吗，可是，被欲望折磨的艺术家却是幸福的。

我渴望画下那位难得在我面前出现而又迅速离开的女性，她像一种令人恋恋不舍的美好的形象，被遗留在旅人背后的黑夜之中。自她消逝之后，已有了多久的时间啊！

她很美，而且不只是美，她令人惊奇。她内里充满黑暗：她向人唤起的一切就是深沉的黑夜。她的眼睛就是朦胧地闪着神秘之光的两个洞窟，她的眼光像闪电一样照人：这是黑暗中的爆炸。

如果人们可以想象有一个倾泻光明与幸福的，黑色的恒星，我要把她比作黑色的太阳。可是，她使人更愿意想起月亮，大概是月亮在她身上留下可怕的影响吧；但这个月亮，并不是像个冷冰冰的新娘似的，牧歌中的白色的月亮，而是挂在暴风狂吹的夜空，被行云催赶的，不详的，令人迷醉的月亮；它不是趁纯洁的人们入睡时前来光顾的，和平的蕴藉的月亮，而是从空中被摘下来，虽败北而并不服帖，被忒萨利亚的魔女们强迫它在可怕的草地上跳舞的月亮！

在她小小的额头里盘踞着顽强的意志和对猎获物的酷爱。在她那神色不安的脸上，有两个吸入"未知"和"不可能"的翕动的鼻孔，而在这脸庞的下部，从那张显出一种难以表达的优美的大嘴里发出哈哈大笑，那张嘴又红又白，芬芳馥郁，令人想到在火山地带刚开出的富丽堂皇的奇迹之花。

有不少女人令人想去征服他们，玩弄她们；可是，这位女性却使人产生这样的欲望：想在她的凝视之下慢慢死亡。

译本选自：恶之花 巴黎的忧郁，钱春绮译，人民文学出版社，1991, p470

文本の分析を通じて、この二人の作品の共性は以下のようであると思う。

①女性は芸術美の化身であり、つまり、芸術美は女性美の伸ばしとなった。この二人の作家は共に、女性象の描写に長け、これが各自の生活経歴とつながっている。上述のように、ボードレールは、自分の恋人、サバディエ夫人を巡り、創作したのであるが、しかし、現実世界において、サバディエ夫人に対する追求はそんなに順調ではない。このよう不順調は、むしろ、ボードレールの心に潜んでいるサバディエ夫人の形象をよりいっそう高めさせ、ついに、極致の芸術美の化身と転化した。谷崎潤一郎も女性コンプレックスもあり、「自分の崇拝している女性がなければ、創作できない。」と谷崎潤一郎がこう言ったことがあり、そういう女性コンプレックスが自分の母によるものである。似ている生活経歴を持っている二人の作家は、文学創作においても、似ているところがある。

また、谷崎潤一郎とボードレールが崇拝している女性象は、伝統的な女性美ではないということを注意しなければならない。このような女性美は反俗的なものである。「書かんとする願望」における女性のイメージから見れば、こういう女性美は、絶対に欧米伝統的まキリスト教の女性美の価値観と合わない。伝統的なキリスト美学と合う女性は、光明の化身であり、目には、単純と光明の光が光っているイメージである。しかし、「書かんとする願望」という詩における女性は、黒色を自分の基調とし、例えば、「Elle le noir abonde：et tout ce qu'elle inspire est nocturne et profound」。彼女の特徴は黒の感じである。彼女が興へる感銘の凡べてのものは夜のように暗くさうして深い。）という文がある。また、彼女を月と喩えしても、伝統的な白く光っている明るい月ではなく、むしろ、「空から引き裂枯れた薄気味の悪い残敗の月」である。

「刺青」の女主人公はも、高雅、含蓄、安静という伝統的な東方の伝統的な女性美と合わない。彼女は遊女の出身であるから、もともと高い身分による美感と無縁であり、そのうえ、醜い蜘蛛を刺青とすることは、一般的な東方の女性に対し、全く想像できないことである。しかし、この美と醜の強烈的比較こそ、われわれに美の張力を感じさせ、美の上の美をくれた。

②この二つの作品において、女性により代表された芸術美の前、男主人公は共に病態的な自我さいなみの傾向を表した。読者の視野から見れば、これが確かにさいなみであるが、しかし、文中の主人公の視野から見れば、むしろ、幸福かもしれない。「まだ見ぬ人の姿かたちを心に描いて、三年四年は空しく憧れながら

も、彼はなほ其の願ひを捨てずに居た。」という「刺青」の原文のように、清吉は、この上ない美しい身体を持っている女性を見つけようとし、彼女のため、刺青しようとするが、しかし、そのような女性がみつけられなかったから、彼はかなり心焦ている。この原文彼見れば、主人公はすでに固執の心理が生じ、この固執こそ、さいなみの源である。美を求める人は、常に、美と醜の激しい対立の間に、さいなみが感じられる。「刺青」の清吉はこのようであるが、「書かんとする願望」の「私」もこのようであり、三島由紀夫の「金閣寺」における溝口もこのようである。「刺青」の結尾において、刺青された女主人公は、清吉に、「お前さんは真先に私の肥料になつたんだんねえ」と言ったが、まさに、上述の見方を証明した。清吉は、最後、芸術美の犠牲者となった。

「書かんとする願望」において、「刺青」と同じように、「私」はある美しい女を描こうとしている。この美しい女は、伝統的な女と異なり、男に「彼女を征服したい」、あるいは、「弄したい」という欲望を感じさせなく、むしろ「、彼女の注視のもとで、死にない」という欲望を弄させた。われわれの読者から見れば、死亡ということは、自我さいなみの極致だろうが、しかし、文中の「私」から見れば、死亡が芸術と合一の始まりである。

この二つの作品は似ているところが多い。これが偶然的ことではなく、作者の類似の生活経歴という要素もあるが、そのうえ、より一層大きな原因は、谷崎潤一郎が創作の早期、直接にボードレールの作品を翻訳したからである。「刺青」も、谷崎潤一郎早期の作品であるから、翻訳を通じ、谷崎潤一郎がボードレールの文学理念及び創作方式の影響を受けたことを予想しがたくない。この故、谷崎潤一郎の早期作品において、ボードレールシンボリズム主義文学における病態美の受容を受けたということは、確実の証明に耐えられると思う。

4．結論

以上のように、ボードレールと谷崎潤一郎それぞれの名作を、テクストの比較分析を通じ、二人の生活経歴とも結び、考察してきた。結論として、以下のようなことを強調したい。

谷崎潤一郎の早期作品には、すでにボードレールに対する受容が存在している。広い視野から見れば、このような受容関係が単なる一つの作家を影響するこ

とではなく、むしろ、数人の作家、あるいは、特定の流派の作家にも影響を及ぼした。日本耽美派の作家群が、ほとんど、欧米シンボリズム主義文学思潮の影響を受けたと思う。フランスのシンボリズム文学運動、あるいは、美学運動は19世紀の末期から拡散し、20世紀20年代ごろ、世界の範囲で、その高潮を迎えた。この時期はまさに、日本の大正初期であり、谷崎潤一郎、永井荷風などの耽美派作家が活躍している時期でもある。この時期において、ボードレールをシンボリズムの先駆として、文学の遡る現象が現れることは、可能であると思う。

やや狭い視野から見れば、谷崎潤一郎がかなり深い欧米言語の知識基礎をもっており、創作早期、ボードレールの「パリの憂鬱」という散文詩集を翻訳したことがある。具体的に言えば、「酔」(Enivrez-vous)、「二重の部屋」(La Chambre double)、「書かんする願望」(Le désir de peindre) など、十篇以上の作品を翻訳した。これらの作品は、「パリの憂鬱」の原作においても、かなり典型的である。谷崎潤一郎が翻訳する時、自分の目的を持っていることが想像できる。翻訳の過程において、谷崎潤一郎自身も原作に潜んでいるボードレールの美学価値観に影響されたと思われる。

内容から見れば、谷崎潤一郎の早期作品において、主にボードレールの「女性美」及び「病態美」を受容した。女性美の受容は、女性肉体に対する描写、及び、女性の胴体に傷つけ、あるいは、壊滅する傾向として理解してもよい。その一方、病態美の受容は芸術美の前にさいなみと自我さいなみの傾向として現れた。しかし、谷崎潤一郎の早期作品において、この二つの美に対する受容が明らかに存在しているが、自分の異変もあるということも注意すべきであると思う。この異変は小説と詩歌の体裁の違いにより生じたものであるが、東方の美意識と西洋の美意識が触れ合う時、互いに影響を発生したことにより生じたものでもあろう。

参考文献

[1] 日本現代文学全集，谷崎潤一郎集（一）[M]，講談社
[2] 日本現代文学全集，谷崎潤一郎集（二）[M]，講談社
[3] 谷崎潤一郎全集（第二十四巻）[M]，中央公論社，1983
[4] Charles Baudelaire, Les Fleurs du Mal [M], BAUDOUIN
[5] Charles Baudelaire, Le Spleen de Paris [M] Folio, 2017
[6] Alexandre L.Amprimoz, La relativité de l'interprétant poétique: L'exeple de Parfum exotique de Charles Baudelaire [J], Semiotica, p259~278, 2009
[7] Elissa Marder, Inhuman beauty: Baudelaire's Bad Sex [J], Differences, p1~24, 2014

[8] 夏尔.波德莱尔著，文爱艺译，恶之花[M]，作家出版社，2012
[9] 夏尔.波德莱尔著，钱春绮译，恶之花 巴黎的忧郁[M]，人民文学出版社，1991
[10] 谭晶华，日本近代文学史[M]，上海外语教育出版社，2010
[11] 普洛坎著，钱培鑫、陈伟译，法国文学大手笔[M]，上海译文出版社，2008
[12] 王雯，浅析谷崎润一郎《刺青》中的女性美[J],文学研究，2013(8)
[13] 林绿，试论谷崎润一郎《刺青》中的女性形象与刺青图案[J]，文学研究，2011(2)
[14] 任向欣，试谈谷崎润一郎作品中的美意识--以《刺青》为中心[J],语文学刊，2015(8)
[15] 杨振，病态与颓废的诗人:对民国时期波德莱尔批评中一种趋向的探源与反思[J]，中国比较文学，2016(4)